

# 続・日本近現代文学に描かれた尾道

——散文関係を中心に——

榎林 混二

## 序

本稿は、平成二十一年前期、尾道大学においてオムニバス形式で開かれた「尾道学」講座で講じた「日本近現代文学に描かれた尾道」（のち、平22・3『尾道大学芸術文化学部紀要』第九号に収録）の続編で、平成二十二年十二月、尾道大学公開講座「尾道学講座」において報告したものである。前稿で私は、日本近現代文学に描かれた尾道について大きく概観し、その意味について小考を試みた。本稿は、その補稿、補綴を試みたものである。

ために、まずは、前稿について少し記しておく。日本近現代文学に描かれた尾道は、大略、四つの段階と内質をもつて展開しているようである。一つは、明治期、そこではいわゆる名所、名勝の地尾道への旅行記、紀行文の形のものが中心となっている。依田学海や田山花袋などが尾道の風景を記した。二つは、大正から昭和前期、尾道に入り、尾道に留まって尾道に材を取った文学が現れる。尾道を描いた、文学らしい文学の登場である。志賀直哉、林芙美子、井伏鱒二らが「尾道の文学」を作り上げた。更には、これら志賀や林芙美子にかかわり、伝説作りが行われる。第三は、戦中から昭和後期。この期は戦中、戦後の混乱の

中、尾道固有の文学は一種の停滞期に入り、昭和後期まで続く。内田百閒、中村光夫、佐々木基一などの言及がある。その中、中村は、千光寺の景観を貶したりし、志賀旧居なども忘れられている。そして、平成以後、好景気や旅行ブームなどともあいまって、尾道の文学は再生する。尾道に材を取った文学とともに「尾道の文学」を訪ねる文学が現れる。観光の地によりかかることもあわせて、いわゆるご当地ものの文学の出現である。山代巴や森岡久元などが「尾道の文学」を描き、西村京太郎や深谷忠記などがある。そして、それらを通してなぜ尾道なのか、なぜ尾道の文学なのかについても考えた。それは、それらの基底にある尾道の風光、人情、それは、港や寺々、坂道などの風景の美しさ、更には、この地の生活や人情の細やかさなどであろうか、それらの存在とその意味について考えた。以上が前稿の概略である。その展開状況を次記〔年表一〕に記した。表の下欄に〔A、風景・名勝〕、〔B、文学化〕、〔C、文学の文学化〕、〔D、風光〕とその展開内質を図示している。

本報告は、前記のようにこの続稿、その補綴を試みたものである。それ故、前稿と同様に大きく四期に分けて追った。ただ、平成期、しまなみ海道の開通などにかかわり紀行文めいたものがでているので、これを新たに加え、それらを〔年表二〕に表示した。以下、順次それらの具体相を追う。事の性質上、前稿と同様に、各例を少し長目に引いた、その様相の顕現化を図るためである。

『日本近現代文学』に描かれた尾道略年表一

- A、風景・名勝(坂、寺、海の町) B、文学化(文学美、再生する美)  
 C、文学の文学化、名所化(こ当地もの) D、風光(暖かき、人情、癒し)

	明治	昭和	戦前	戦後
① 依田学海「尾の道」(『漫遊の借楽』明24・6～10『国民之友』)				A
② 青萍迂人「尾道の古書画」(『漫遊雜記』明24・12『国民之友』)				B
③ 大和田建樹「ふるさと日記」(『散文韻文 雪花』明30・9 博文館)				C
④ 田山花袋「瀬戸内海」(『続南船北馬』明34・7 博文館)				D
⑤ 拈華散人「尾の道」(『現代乃美文 山紫水明』明39・5 武田文盛館)				

大正から昭和戦前期

⑥ 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」(大2・1)				A
イ、「児を盗む話」(大3・4)				B
ウ、「暗夜行路」(大10・1～昭12・4)				C
⑦ 森 鴎外「伊沢蘭軒」(大5・6～9)				D
⑧ 林芙美子「放浪記」(昭3・10～5・11)				
イ、「風琴と魚の町」(昭6・4)				
ウ、「文学的自叙伝」(昭30・7)				
⑨ 井伏鱒二「私の愛好する島と海」(昭6・8)				
イ、「微弱なる心痛」(昭7・6)				
ウ、「集金旅行」(昭10・5～21・9)				
エ、「志賀直哉と尾道」(『晩秋』挿話)(昭10・11)				
オ、「尾道の寓居」(昭29・6のち『作家の寓居』と改題)				

昭和後期

⑩ 内田百閒「阿房列車」(昭26・11)				A
⑪ 中村光夫「暗夜行路の尾道」(昭28・8)				B
⑫ 佐々木基一「尾道」(昭52・4)				C

平成以後

⑬ 山代 巴「千代の青春」(平元・4～3・3)				A
イ、「私の学んだこと」(平2・12)				B
⑭ 西村京太郎「尾道に消えた女」(平3・11)				C
イ、「尾道・倉敷殺人ルート」(平5・8～11)				D
⑮ 深谷忠記「尾道・船取殺人ライン」(平5・8～11)				
⑯ 森岡久元「尾道渡船場かいわい」(平12・11)				
⑰ 茂木健一郎「瀬戸内の陽光」(平19・3・25『読売新聞』)				
⑱ 児玉憲宗「尾道坂道書店事件簿」(平21・3)				

『日本近現代文学』に描かれた尾道略年表二

- A、風景・名勝(坂、寺、海の町) B、文学化(文学美、再生する美)  
 C、文学の文学化、名所化(こ当地もの) D、風光(暖かき、人情、癒し)

	明治	昭和	戦前	戦後
① 幸田露伴「いさなとり」(明24・5～11『国会』)				A
② 幸田露伴「まき筆日記」(『枕頭山水』明26・9 博文館)				B
③ 高安月郊「夜濤集」(明33・12 私家版)				C
④ 河東碧梧桐「続千里」(『続一日信』明43・11～12『日本及日本人』)				D

大正・昭和戦前期

⑤ 志賀直哉「私信」(大元・12『白樺』)				A
⑥ 川田 順「技芸天」(大7・3 竹柏舎)				B
⑦ 倉田百三「青春の息の痕」(昭13・12 大東出版社)				C
⑧ 倉田百三「光り合ういのち」(昭15・12 新世社)				D
⑨ 志賀直哉「尾道・松江」(昭31・7『婦人公論』)				

昭和後期

⑩ 吉川英治「私本太平記」(昭33・1～36・10『毎日新聞』)				A
⑪ 松本清張「内海の輪」(昭42・1～43・10『週刊朝日』)				B
⑫ 津本陽「拳豪伝」(昭58・12～59・9『山陽新聞』他)				C
⑬ 今野敏「山嵐」(平12・11 集英社)				D

平成以後

⑭ 田辺聖子「ずぼら」(平4・11『小説宝石』)				A
⑮ 山と溪谷社大阪支局編「瀬戸内こころの旅」(平12・1山と溪谷社)				B
ア、「山中恒」時空を超えてさまよえる町「尾道」				C
イ、「新藤兼人」段々畑とあの白い道はいま				D
ウ、「喜和彦」しまなみ海道ひとり旅				
エ、「竹内鉄二」しまなみ海道、六つのピークを踏む				
⑯ 熊谷 獨「尾道少年物語」(平12・8 文芸春秋)				
⑰ 今井絵美子「蘇鉄のひと 玉蘊」(平14 郁朋社)				
⑱ 大谷羊太郎「瀬戸尾道殺意の迷路」(平15・7 双葉社)				
⑲ 木谷恭介「尾道殺人事件長編旅情ミステリー」(平15・7ワンダーマガジン社)				
⑳ 西村京太郎「しまなみ海道追跡ルート」(平16・9 徳間文庫)				
㉑ 五木寛之「百寺巡礼 第八巻山陰・山陽」(平17・3 講談社)				
㉒ 恩田陸「幻影キネマ」(平18・10『パピルス』)				
㉓ 光原百合「帰去来の井戸」(平18・10『オール読物』)				
㉔ 本城英明「警察庁広域特捜官梶山俊介広島・尾道刑事殺」(平21・9 講談社文庫)				

(一)、明治期

前稿に記したように、明治期は、まだ、「尾道の文学」といった特立のものはない。名所旅行記、紀行文の形のもので、少し補填する。幸田露伴に陸路からと海路からの尾道入りがある。ともに海的美を語り、前者に旅情を、後者に旅の楽しさを港町尾道に見出している。

備前備中備後の尾の道にさしか、りし時、日は西方に落ちて海面美しけれど思ひある身には憂愁の湧く夕暮、つくづく此身の行く末をおもへば根の絶し藻の寄るべ定まらず風に任する雲より頼み少く、何うなるべきとも自分ながら分らず、

(「いざなとり」明24・5～11『国会』)  
尾ノ道にて船少しく停まりし間に、物売る船の男の菓子保命酒蒲鉾など、口々に叫びながら此方の船に小舸を漕ぎ寄せて、購ふ者あれば玉網に物を入れて高く捧げ出せるは見る眼珍らしく面白く覚えぬ、また船の中に種々の素麵を造り出でたる男のありて、捻り素麵飛白素麵阿波の鳴戸の渦素麵などをかしき名呼びたてて乗り合ひたる人々に売らんとせるには山人も我も忍びかねて笑ひぬ、

(「まき筆日記」〈『枕頭山水』明26・9 博文館) 輛の保命酒や尾道の蒲鉾などは今も残る名物だが、「捻り素麵飛白素麵阿波の鳴戸の渦素麵」とはいかなるものだろうか。

河東碧梧桐は、汽車で、入っている。前日、竹原から船

で尾道にと思うが風雨に妨げられ竹原から本郷まで歩き、本郷から汽車で尾道入りしたと記す。明治四十三年のことである。

十一月十七日。曇、霰降る。

船の失敗を繰返すのを厭うて陸路を取った。曲りの峠を越えて本郷に出て、本郷より汽車、午後一時過尾道の道に着いた。

昼飯後千光寺に登った。山上大石の露出してをる様は、石山以上だと一峰がいふ。然かも眼下の鶴湾を始め、瀬戸内海の眺望豁達である。三井の眺望を石山に収めたものだと、矢張一峰の評であつた。鐘撞堂のほとりに一基の石碑がある。縦三尺余、幅一尺許りの普通の四角な碑である。篆額に「瘞紅碑」の三字が見える。山陽と竹田の二人と、同人則々庵の祖父にあたる人の三人の書が刻してあるといふ。文章を読むと、ここに挿花の枯死したのを埋めたといふ来歴が書いてある。

(「続三千里」〈「続一日一信」明13・11～12『日本及日本人』) )

碑中の文字について「山陽通の猶存は、最初の二三行の書は山陽に相違ない、と保証する。」などと記しつつ、次のように尾道の文化について論じている。

尾の道が要津を控へて、文華早く開けたのみならず、土地の旧家が風流三昧に耽溺して、時の文人墨客を欸待し優遇した史実は、この一碑の面にも明瞭な印影を留めてをる。六朝の瘞鶴銘を模した気取りかたに見ても、煎茶趣味が那返にまで及んでをるかが略ぼ想像さ

れる。雨露に晒されて、今は見る影もなく寂びれてをる。今日ここにかかる碑文の現存することを注意する人も少ないであらうが、尾の道趣味を代表するものとして、保存の道を講ずべきものだと予がいふ。鶴水館泊。(備後尾の道にて)

翌十八日は、西国寺に詣り、多宝塔を観、その次十九日には、次のように記している。

十一月十九日。晴。

例によつて筆を手にしてをると、瓢箪通の宿の主人が、秘蔵の瓢を並べて何か題句をといふ。尾の道には有り得べきことだ、と

奇瓢手入れして匂玉や吐く思ひ

と題する。

志賀直哉「清兵衛と瓢箪」(大2・1)を思い起こす。

尾道は、当時、瓢箪の町でもあったようである。二十日は、「船で尾の道を立」、「船中から阿武兔の観音を、見て、鞆にあがつた」と続く。

前後するが、高安月郊の『夜濤集』(明33・12 私家版)の中に、次のような一節がある。当時、尾道と鞆とは、多く船便であったのであろうか。

あないと狭き尾の道に

高く光るは烏帽子岩

誰に着よとか寺立てて

待つとしもなき観音の

水や想ふて岩ばなに

醒る向に酔ふ人は

今に眠りもさめざらん  
隣る天女の琵琶絶えて

鞆は納まる女君

筆や納めん歌人に

いのち保てと酒すすむ

尾道と阿武兔の観音や保命酒の鞆などが一連につながっている。

## (二)、大正・昭和前期

志賀直哉は、「児を盗む話」(大3・4)や「暗夜行路」(大10・1〜昭12・4)を発表する前、早く、大正元年十二月「私信」と題して、尾道での生活をかなり詳しく『白樺』に報告している。当時の志賀の生活や性向などが知れる。

此家へ来て一週間になる。暮らしは中々自由にしてゐる。

来た日に直ぐ畳屋と提灯屋を呼んで来て畳と障子を新しくさせた。翌日電灯屋が来て十六シヨクの灯りをとりつけていつた。其晩自分で会社まで出かけて青色のついたカサを買つて来てそれをつけた。その翌日瓦斯屋が来て、シチリンとストーブをとりつけて行つた。僕は町へ行つて牛肉の百目のカタマリとヘットとコシヨールとジャガイモとフライ鍋を買つて来て其晩ビールステーキを作つて食つた。

メシは隣りのバアさんがタイてくれる。食器も洗つ

てくれる。雑さんもかけてくれる。使ひ水もくんでくれる。静かな親切なイイ婆さんだ。僕は婆さんには可愛がられる素質があるのだらう

僕は所帯道具は大概のものは買ひ集めて了つた。出刃でも薄刃でもマナイタでも。此マナイタは真中に出刃で細い溝を作つて一方を野菜、他方を肉類といふ事にした。

中々智慧があると自分でも思つた。

「婆さんには可愛がられる素質がある」、「中々智慧がある」など、いかにも白樺的である。便所の「防臭液」まで揃え、更に、部屋が淋しいと「呉服屋」に行き、「更紗の切れ」を「五尺づつ三つ」買つて壁に下げ、これも「大出来」と自讃している。生活は次のようである。

然し運動のないには困つてゐる。千光寺といふ高い山にある石段を下から二段づつマタイで駆け登る運動は毎日やつて見たが少し過激でブツ倒れさうになる。昨日と今日とはたうとう休みにした。

続いての一節は、前半は「暗夜行路」の、後半は「清兵衛と瓢箪」の原材か。

此地の地理は君のいふ通りだつた。海の方に家があつて汽車が山の下を通つてゐる。僕の家はその山の中央にあつて恐しく晴々した景色を前に持つてゐる。向ひ島といふのが前にある。その山の上に夜になると内海の何とかいふ小島の燈台のグルグル廻る火が、時々ピカピカと光つてゐる。昼間は遠く伊予の山も見えてゐる。(中略)

此土地ではヒョータンが大流行だ。ヒョータンを持つてない人はないといつてゐた人があつた。色々な処にぶら下げてある。僕も自分の趣味を本位にして見て歩いてゐるが中々ない。

それから此所の言葉は余り感心出来ない。何々したけんなどいってゐる。遊廓は中々広い。東京の割り合としたら赤坂全体を遊廓にしてゐるやうなものだ。

とりわけ、「僕も自分の趣味を本位にして見て歩いてゐるが中々ない。」などの一節は「清兵衛と瓢箪」の主モチーフとかかわりそうである。

大正元年の日記には、これらのもっとコンパクトな生活記録がある。「溜飲」は、むなやけ、「さいでう」は西条柿か。

十一月十八日 月

朝三時頃まで目ざめてゐた。

溜飲を起した。十一時頃メシを食つて千光寺の石段を半分ばかりかけ上つたらくたびれた。町へ下りて鶴水館により前の玉突に行く。下等な奴がゐたので一ゲームだけで帰つて来る。東京の事を考へた。ステーションに行つて、旅行案内を買つてかへる。

此朝瓦斯屋が来て、とりつけだけして行つた。夕方又千光寺の山へのぼる。

あしたから何かしやうと思ふ。

直ぐ下の町にチブスカ何かあつて消毒で騒いでゐた。帰つて来て直ぐさいでうを二つ食つた。

ずっと後、志賀は、次のように回顧している。尾道在住

は、大正元年十一月から二年後半、三十一歳から三十二歳の頃のことである。

尾ノ道は実は偶然な事から行くことになつたので、何の予備知識もなく、丁度友達が満州からの帰途、汽車の窓から見て、いい所だと云つたのが動機だつた。そして、それから一週間程して出掛けた。実際に住んだのは三四ヶ月だが、家は一年間借りてゐた。私はそれまで明石以西には行つた事がなく、又、子供から四週間以上自家を離れた事がなかつたから、独りそんな遠い所に行つて、東京が恋しくて困つた。「暗夜行路」の前身である時任謙作といふ初めての長篇を書くつもりだつたが、なれないのと力の不足から散々に手古摺つて、神経衰弱のやうになつて了つた。然し若い頃でもあり、その時の経験は強く印象に残つて、後ちに「暗夜行路」を書く時、その時の経験は随分利用する事が出来た。住んだ期間は短かつたが、今でも色々憶ひ出す事が多く、当時の苦しい気持も、今となれば、あるいい記憶として残つてゐる。

（「尾道・松江」昭31・7『婦人公論』）

「今となれば、あるいい記憶として残つてゐる。」とは、実感であつたらう。更に同文は次のように続けている。

旧居——これは本統にひどい陋屋だが——の近くに「暗夜行路 志賀直哉」といふ碑が建つたさうだ。建碑のあつた時、私は極力断つたが、遂に建てて了つた。昔、「暗夜行路」の前編だけを出版した時に、犬養健君に頼んで書いて貰つた題簽を、そのまま石に彫つ

たものだ。その事を手紙で犬養君に知らしたら、若い頃書いたもので、あれは閉口だといふ返事を貰つた。

次いで、正統な尾道の文学として、私は、倉田百三の言及も加えていいのではないかと思う。尾道に対して倉田は少しく苦言を呈している。大切に考えたいことである。そもそもは、尾道は、美しかった姉の嫁ぎ先であつた。しかし、その姉は肺を病んで死んでいく（「青春の息の痕」昭13・12 大東出版社）。倉田は、三次中学の学生時代、脚気を病み、また、精神的な壁にぶつかり、一時、休学して尾道のこの姉のところに来ている。

尾道へ！

と私は思った。南の海のほとりの尾道。商業殷賑な、花やかな港街、美しい島々と山の上の寺々。風光明媚な玉の浦の名は祖母から幾度も幾度も聞かされている。その美しい市街は一度見て知っている。それにそこにはあの大好きな種子姉がいるのではないか。尾道一のハイカラな洋品店と西洋人形を飾つたショウキンドー。鏡と灯の多い明るい感じは今もおぼえている。

尾道へ行こう。尾道へ！

こう思い出すと私は矢も楯もたまらなくなつた。私は夏休暇は少し気のあつた脚気を口実にして、とうとう休学届を出してしまつた。

宗藤の人たちも、両親も私の内面の動揺のことはもとより知らなかつた。学校好きの私がわざと休学するなどとは想像つかなかつた。

私は尾道の姉に手紙を書いた。すると大喜びで種子

姉は一日も早く来いと言ってよこした。

（『光り合ういのち』昭15・12 新世社）

尾道は美しい都、栄えた都で、倉田にとつて憧れの地であった。ここで、恋をしたり、学問に励んだり、多感な青春の日々を送る。しかし、次第に倦いてくる。当代の尾道は、商業の町として栄えてはいた。だが、若き日の倉田は、そこにより内に魅するものを見出さなかった。次のように続ける。

尾道での年少の私の憧憬はもとより思春のものだけではなく、文化と学芸と——いのち一般の美しいものに、価あるものへの思慕であった。もし尾道という土地にそうした、施設と雰囲気とがありさえしたら、私は勿論燃えるような熱情をもってそれに向かつて行つたであろう。しかし不幸にして尾道には商業学校以上の学校もなく、芸術的なサークルもなかった。私のいのちの中の一番のエレメントを引き出す空気が欠けていたことは惜しむべきことであった。実際私はどんな高い文化と教養との素地的な訓練にも応え得る玉のよいうなナイーブさと、鋭い感受性を持つた少年だったのだ。周囲は私にとつて常に足りないものであったことは今なお憾みとせずにはいられない。

倉田は戦前の尾道に、「文化と学芸と」がなかったと嘆ずる。今少し引く。

思えば私は尾道でも美しいもの、価あるものを掘り出すように探し求めていたのだ。美しい、温かい瀬戸内海的な自然、クラシカルな匂いのある寺々、それは

尊いものであったが、人間のつくり出す尾道のカラーは、美しい時にも多少商業的な卑俗性を持ったものであった。しかし殷賑な通商、豊富な漁猟によって生氣を帯びた生活エネルギーは、比較的不便な陸路のために封鎖的になったこの港街に独特な精彩と活況とを与えた。そしてそれが、幾世代に渡り保存されたので、由緒ある港としてのいぶしがかかって浅膚さからすぐわれていた。年少の私はそうした空気の中から美と生命とを探し出そうとしていたのであった。

尾道の思い出が、少女達との思春の絵本や、手習いのすさびのようなものしかないのはそのためであった。

かつての尾道に「文化と学芸と」がなかったと難じているので、これは尾道にとつてかなりシヨックで、重く考えるべきことでもあろう。

ただ、一言つけ添えれば、その尾道は戦後早く、中井正一らの尽力で、女子専門学校を作っている。尾道に優れた教育・文化の先蹤がある。その流れの上に、尾道短期大学、そして尾道大学がある。倉田がこれらの時期に来ていたらと思つたりもする。しかし、今、それに応じるものがあるか。これは現在の尾道大学が受け継ぎ、考え、発展させなければならぬ大切な課題でもあろう。

### （三）、昭和後期

戦後から昭和後期、志賀や林芙美子、井伏などとは少し違う、尾道に材をとつた作品が幾つか出ている。後にいう、ご

当地ものとも違うもので、尾道に寸景的に触れた作品群である。

吉川英治「私本太平記」（昭33・1～36・10『毎日新聞』）の中、足利尊氏が九州から周防の釜戸ノ関（現・上ノ関）を経、「安芸の厳島神社」に「代参の使い舟」を派遣、尾道に、軍を進めてくる。

すすんで、備後の尾ノ道に入港したのが、五月五日のひるだった。

「――男の節句」

と、尊氏は知っていた。

「酒酌もう。重五の祝いだ。土地の美酒を酌みながらさいごの軍議をとげようぞ」

おもなる大将をみなつれて、尾ノ道の山ぞい町からすぐ上の浄土寺へ休憩に入った。

浄土寺の僧、道謙は、

「これはまた……」

と、俄な申し入れにうろたえはしたが、しかし寺中をあげて、尊氏や直義ただよし以下のために、客殿を挙げ、この不時の珍客たちの憩いに供えた。

足利軍は、ここで軍議、これまでの水軍中心から、「上洛の東上戦略」として、「海陸軍が二タ手」に分かれ、進むことがきまった。

妻がいながら、松山にいる兄嫁との情事を行う。松本清張の「内海の輪」（昭42・1～43・10『週刊朝日』）では、東京にいる主人公が兄嫁と、松山と東京の中間の地として尾道で逢う。清張らしい暗い作品で、主人公は兄嫁を

殺す。次は、尾道駅前、連絡船の発着場での状景である。

商店街をつつ切ったところが広場で、駅は右手に見える、連絡船の発着所は左手にあった。建物の上に航路の、大きな看板があがっていた。

中にはいると、左側はフェリーボートだか遊覧船だかの発着場で、今治通いの汽船は右手だった。

駅の構内で見かけるような売店があつて、うす暗い待合室には、若い女がひとり腰かけて雑誌を読んでいた。栈橋にゆく通路の上には点々と灯がついていたが、改札口は閉まっついて人影がなかった。海から漁船のエンジンの音が聞こえていた。

「寂しいな」

宗三が思わず言うのと、

「今治行はもう終わったのよ。あとは、どこかの島通いの船が出るのかもしれないのね」

と、美奈子も彼の傍に立って見回していた。眼鏡をかけた売店のおばさんが店を仕舞いかけていた。汽笛が短く二度鳴った。

天保四年、山陽路は「未曾有の旱魃」にみまわれる。収穫の秋をひかえ、田圃はひび割れ稲は枯れ死の前の状態になる。人々は若き日の拳骨和尚物外に「雨乞い」を依頼する。津本陽「拳骨伝」（昭58・12～59・9『山陽新聞』他）の中の一節である。

「僕らは漁師じゃが、日照りがつづいて難儀するのは、農家のお人らとは変わらん。海の水が雨が降らずに塩辛うなりすぎれば、魚も獲れんようになる。雨乞いを

在所にばかり任せておらずに、われわれもやろう」

言いだしたのが吉和浜の網元、勘三郎である。知つて、居あわせた人は耳をかたむける。彼は、尾道の禅寺濟法寺の檀家総代であつた。

「濟法寺の和尚さんは、諸国で修業学問してきんさつた善知識じゃ。江戸駒込吉祥寺山内梅檀林（駒沢大学の前身）にも、三年間の掛錫しんさつて、勉強なさつたそうじゃ。そがいな偉い和尚さまに、ひとつ雨乞いをお願いしようではないか」

周囲の者は、賛成する。

「そりゃ、ええ考えじゃ。さつそく明日にもお願いしてくんさいや。頼みますらあ」

勘三郎は翌朝、他の総代たちを訪ね、雨乞いの一件を相談した。

「そりゃ、ええ考えじゃ。それでは物外禪師にご祈祷をお願いしよう。」

合議は一決し、総代たちは揃つて濟法寺に向いた。住職武田物外は三十八歳の男盛りであつた。彼は広

島城下伝福寺観光和尚の弟子であつたが、四年前、ながらく無住であつた濟法寺の、後住となつたのである。

これまで、尾道の寺といえは、千光寺、西国寺であつたが、舞台は浄土寺や濟法寺などに広がつてゐる。

少し後になるが、今野敏「山嵐」（平12・11 集英社）は、尾道で最後を送つた、姿三四郎のモデル西郷四郎の生と死とが描かれている。この舞台は浄土宗の寺である。晩年、「親類の浜口嘉四郎」から、氣候のいい尾道に來いと

勧められる。

四郎は、その勧めを受け容れることにし、長崎から、尾道に越した。ここでも浜口がいろいろと世話をしてくれた。

浜口が仕事の都合で大阪に越すといふので、一度それについて、四郎一家も大阪に移つたが、間もなく再び尾道に戻り、浄土宗の寺、吉祥坊に居を構えた。

四郎は浜口の事業を手伝つていたが、やがて、その事業がうまくいかなくなる。浜口は向島の造船所で働くようになり、四郎は吉祥坊で療養生活を始めた。

体の調子のいいときは、水墨画を描いたり、書をしたためたりしていた。ときには、弓を引くこともあつた。

吉祥坊は、石段を登つた高台にある。尾道は、どこもかしこも坂と石段だらけだ。高台からの眺めは格別で、瀬戸内海とそこに浮かぶ島々が見渡せる。

四郎は、その風景を眺めながら、これまでの人生を思うのだった。特に思い出されるのは、昨年こぞの嘉納邸での会合のことだ。

尾道に移つた翌年のこと、娘の幸子が、広島県立尾道高等女学校に合格した。四郎は、それが誇らしく、幸子を何度も褒めてやつた。幸子は、優しい娘に育つてゐる。

尾道の寸景群である。

#### (四)、平成以後

平成期、尾道の文学は、多彩になる。そこに三つのものがある。一つは、尾道に材を取った文学、「尾道の文学」の本流のものである。二つには、「尾道の文学」を材にした文学、更には、いわゆるご当地もの、三つに、名勝、風光の地を旅する紀行文的なもの、これは、明治期にでていたが、その現代版風なもので新紀行文とでも言おうか。順次、少し追ってみる。

(1)、本流のもの

前稿では、平成期、尾道を描いて本格的なものとして、山代巴や森岡久元の作品を挙げたが、それに今少し加えてみたい。

熊谷独『尾道少年物語』（平12・8 文芸春秋）は、尾道で過ごした信一という少年の成長を描いて優れたものの一つである。尾道の風光、生活、いずれをとっても魅力的である。次に引くのは、戦後、尾道に進駐してきたアメリカ軍のさまを見事に描き出していて、尾道いや日本に、こういう時代があったのだと今更ながら思わせられるものである。これまでにない尾道の風景として、少し長く引いてみる。

アメリカ合衆国第六軍第十軍団第四十一師団第百六十二連隊将兵約一千人は、昭和二十年十一月三日、大型輸送船にて尾道港に来航、日立造船所先島工場に上陸した。

輸送船の船腹に積載したS Bと称する上陸用舟艇六隻に分乗、尾道市への進駐を開始した。

十一月三日は気象学上「晴れの特異日」と呼ばれる

晴天の確率が高い日であり、のちに「文化の日」に定められるこの日も朝からよく晴れ、瀬戸内の海は風いでいた。

先島と尾道市街のあいだの狭い海峡を六隻のS Bが白い航跡を描きながら、高速で突き進んできた。

上陸地点は葦和の新浜の海岸。

ここは製材所跡地の通称「すべり」と呼ばれる傾斜したコンクリートの材木引き揚げ場で、上陸点としては最適の場所であった。米軍は周到に事前調査をしたものと思われる。

S Bはつぎつぎに接岸、軽武装の戦闘員を先頭に上陸した。上陸地点で隊列は二手に分かれ、一隊は尾道商業へ、別の一隊は旧日本陸軍暁部隊の兵舎へと行軍を開始した。隊列はいくつかの小隊に分かれ、小型の国旗を立てたジープが低速で先導していく。輸送船が六隻もの上陸用舟艇を船腹に積載していたのも驚きだったが、その上陸用舟艇に数台のジープを積んで接岸、上陸する周到さに圧倒された。尾道市には自動車は消防車、警察の車、木炭バスなど数台しかなく、葦和には一台もなかった。

車はもちろん人影も途絶えた国道二号線を隊列は整然と行進していく。

尾道商業の校舎を前日までに明け渡すよう指令があり、生徒は市内のほかの学校へ分散、合同授業を受けることになっていた。暁部隊の兵舎は進駐軍受入れのためすでに整理されていた。この日米軍が進駐してく

ることは、尾道じゅうの住民が知っていたのである。これらを、信一たちは山の上から眺める。

「進駐軍がくるけえ、ねきへ行ったらいけんぞ。手を合わせたりおじぎをしたら鉄砲で撃たれるそうな」

ばあちゃんと母に禁じられていたが、信一は近所の子供たちと誘い合わせて虚空蔵山から見物することにしたので。

尾道出身、数奇な運命をたどった画家平田玉蘊の生涯を描いた、今井絵美子の『蘇鉄のひと 玉蘊』（平14 郁朋社）が次いで挙げられよう。主人公豊は、「瀬戸内の海」とりわけ「備後灘、尾道水道に入ってから風景が堪らない」のである。暇さえあれば、「画帳を手に、鰻か泥鰌の寝床のように細長く東西に横たわる尾道の町並み」を「生写し」している。次のように尾道は描かれていく。

考えてみれば、尾道とは、実に不思議な町並をした湊町である。片側に海を抱いたその目を動かすことなく、もう片側に小高い山並を捉えることが出来るのであるから……。

片側を海で塞がれてしまえば、勢い、町並は山へと伸びていく。古くから対明貿易で栄えたこの町は、毛利家統治の時代に栄華を極め、その後、福島家、そして現在の浅野家になってからは、寛文十一年（一六七一）の西廻り航路の開通により、瀬戸内屈指の商業都市となっていた。土地面積、人口の割に、寺院が多いのもそのせいである。

山は切り崩され、石畳の階段が、上へ上へと伸びて

いく。

豊の生家、木綿問屋福岡屋も、そんな中にあった、だが、幸運にも、福岡屋は尾道水道と並行した山陽道に面していた。生写しのそろぞ歩きなどしなければ、大概の用は平地で足せる。何もしんどい想いをして、石の階段を上り下りせずとも済むのである。

だが、豊には、このちょっとした疲労感が堪らない。

たった今見てきたこと、生写ししてきたことが、身体が疲労した分だけ滋養となって、心から身についたと思えるのであった。

また、場として、尾道を描いた恩田陸「幻影シネマ」（平18・10『パピルス』）などもある。

実は、彼らは、ミュージッククリップのロケハンをしているところなのだ。

H県O市。瀬戸内海に面した、気候の温暖な景勝地である。世界的名匠と言われる映画監督の代表作を初め、近年も好んでこの地を舞台にする監督がいて、古くから映画のロケ地として知られて来た町だ。

しかし、尾道を描いて美しい文学となったものに、光原百合「帰去来の井戸」（平18・11『オール読物』）、のち、『扉守』（平21・11 文芸春秋）所収）がある。埋め立てられた町中に残る「雁木」のあとにかかわる、美しいファンタジーの作品である。「雁木」やかつて尾道の栄えた様子を次のように描いている。

石段のごみを掃き下ろしていきながら、ここが昔は雁木だったと初めて聞いたときは驚いたな、と思い出

す。雁木とはこの地方では、岸壁から海に向かって作られた階段状の構造のことをいう。内陸の町から潮ノ道大学に進学してきた友人は、「どうして海から階段が上がつているの？」と驚いていたが、このあたりではごく普通の眺めだ。潮の干満の差が大きい海岸では、雁木のところに舟をつないでおけば、潮が引いて海面がずつと下がっても段を降りて舟のところまで行けるわけである。

その雁木がなぜここにあるのかといえば、昔はちやうどこのあたりが海岸線だったからだろう。江戸時代に埋め立てが行われて、海は南に五十メートルほど退いてしまった。元の海岸に沿って作られていた雁木の一部が、小路の途中に残って、今でも階段として使われているわけだ。小路の南の端は海岸通りに接しているが、その向こうの海べりにも建物が並んでいるので、今では海はここからまったく見えない。

埋め立てでできた土地は当時、大変な賑わいだったらしい。信仰の拠点だった頃から時代は移り、その頃の潮ノ道は北前船の重要な寄港地として栄えていたからだ。このあたりは集まってくる商人や船乗りを相手にする一大歓楽街だったという。少し海岸よりの土地には実に二千人収容可能な芝居小屋があったというから半端ではない。陸上交通が主流の時代になってからすっかり静かになった今の潮ノ道は、観光地としてはそこそこの人気を保っているが、その規模の芝居小屋を維持するのはとうてい無理だろう。

この作品を含む『扉守』は美しいファンタジックな尾道作品集である。

(2)、ご当地ものとして

前稿でも見たように、観光ブームなどとあいまって、尾道、「尾道の文学」の文学化されたものが多出する。いわゆる、ご当地ものである。美しい尾道の風光そして、志賀直哉や林芙美子、文学の小道などにかかわり、それらの文学が一種の名所化し、そのあとを追う、あるいはそれらによりかかりつつ、物語の展開がなされていくものである。

正統派の文学に入れるべきかなと迷いもしたが、田辺聖子「ずぼら」（平4・11『小説宝石』）は、何とも楽しい尾道への旅行を材にした物語である。酒と食べ物にしか関心のない恋人塩田と尾道を旅する。二人の感覚の落差がいかにもおかしく楽しい。一節を引く。

とにかくホテルに荷をおこうとぶらぶらあるくと、商店街の入口に、通りにお尻をむけて銅像の女がうずくまっていた。林芙美子の銅像だ。昭和初年の『放浪記』のイメージに合わせたものだろう。右手を膝のせ、左手の人さし指をかるく頬にあてて、好きなふるさとの尾道の海を見ているという風情、耳かくしの髪に着物、そばにバスケットの旅行鞆と蝙蝠傘がおいであるのが、芸がこまかくていい。東京から戻ってきたという風情だろうか、

「この顔、高峰秀子に似てるねえ」

と私がのぞきこんだら、

「老ねたちびまる子みたいや」

塩田は唸った。私はというと、やさしい面ざしの林芙美子の銅像で、かなりこのまちの感じがよくなっていった。新しい町へ入ってゆくとときほど、気分の弾むものはない。

私たちは駅の西のホテルに入って、荷物をあずけた。ホテルといっても宿屋ふうに一泊二食付となっている。

大谷羊太郎『瀬戸尾道殺意の迷路』（平15・7 双葉社）は、消息を絶った父を探すという形での尾道の旅である。

尾道は向島と、島の名のとおり向きあっている。その間隔は、わずか二百メートル。だから狭まれた部分は、海と呼ぶにはふさわしくないのです、尾道水道と呼ばれている。

向島の海岸に並ぶ造船所のクレーン塔が、広場の向こう、水道をへだてて見える。広場の左右に、いくつかモダンなビルがあっても、開けた視界をさまたげるほどのことでもなかった。

（早く、父の消息を探りたいな）

強い思いにせかされて、真美子は持参してきた町の案内図を取り出した。

次のように「海岸通り」に始まり、尾道の町並みや島々めぐりが描かれていく。

「海岸通り」と、地図に示された海辺の道を、真美子は進みはじめた。

しばらくは、タイルできれいに舗装された遊歩道が

つづいている。とところどころ青銅の女性裸像まで立っていた。岸壁には、大小の漁船やボートが、ずらりと係留されているし、水道をへだてた向島は、ドッグのほかに、あまり高くない山を背景に、岸辺には建物がひしめいている。

（海にしては、ずいぶんと静かね。）

木谷恭介『尾道殺人事件 長篇旅情ミステリー』（平15・7 ワンツーマガジン社）では、「川のような海」、「尾道大橋」の方から尾道に入り込んでくる。林芙美子の「海が見えた。海がみえる。」（「放浪記」昭3・10〜5・11）という一節に引かれ、それに合わせて、わざわざ在来線に乗り換え、福山方面から尾道に入ってくるのである。

茫洋とひろがる広い海ではなく、対岸の向島とのあいだに細長くつづく、川のような海であった。

川のような海には尾道大橋が架かり、電車がゆるやかにカーブすると、尾道の家並が急に数を増した。

向かいの島も、こちらの尾道も、背後にすぐ青葉の山がせまり、民家やビルが密集しているのは、ほんの一区画で、電車はその市街地を避けるように山裾を迂回して尾道駅のホームへ滑り込んだ。

赤い千光寺の塔が見えたし、緑色の海の向こうには造船所がひしめくように並んでいて、クレーンが林立していた。（中略）

紗智はこうした生活の匂いのする風景が好きだったが、あつという間にとおりすぎた感じで、気分って、わざわざ在来線に乗り換えるほどのことはなかったよ

うだ。

「海はたしかに見えましたがね」

ホームへ降りながら、花輪が微笑まじりに顔を振り向けた。

「期待しすぎて、拍子抜けしちゃった」

「それもあるだろうけど、所詮、オレたち仕事の出張だからな」

風情を感じている余裕などないというように、駅のひとごみを突っ切り、駅舎を出たところで足をとめて、町を見まわした。

これは、私もまさしく同様に感じたので、「放浪記」のこの一文の形で尾道に入ってくるには、下りよりも上り線で三原、糸崎のほうから入るとそれに呼応するところがあるように思われる。とまれ、尾道殺人事件はこの風土の上に繰り広げられる。

そして、西村京太郎の「尾道に消えた女」（平3・11）、  
「尾道・倉敷殺人ルート」（平5・8〜11）などはすでに前稿で見たが、彼は、更に本州、四国をつなぐしまなみ海道にまで手を広げる。『しまなみ海道追跡ルート』（平16・9 徳間文庫）は、今売り出し中の観光ルート、しまなみ海道の案内記である。少し引く。

しまなみ海道の、尾道側から数えた、三つ目の生口島は、自然と文化が、巧みに混り合った島である。

この島は、人口一万人あまり、島の傾斜地には、柑橘類が植えられていて、レモンは、日本一の出荷量を誇っている。

島の東側には、世界初の柑橘類のテーマパークがあり、この生口島は、文字とおり柑橘類の島である。

その一方、この島には、いたるところに、野外彫刻が置かれている。島ごと、美術館にしようという運動なのだ。

また、この島は平山郁夫が育ったところということで、立派な平山郁夫美術館がある。

また、ここには、日本一の音響効果を誇る音楽ホール「ベル・カントホール」がある。もう一つ、この生口島で有名なのは、耕三寺である。

こういった形で、ご当地もの、尾道ガイド、尾道文学ガイド的な文学が次々と出てくる。それらの最近の一つとして、本城英明の『警視庁広域特捜官 梶山俊介 広島・尾道「刑事殺し」』（平21・9 講談社文庫）がある。捜査にかかわりながら、尾道を描き、「こうあって欲しいと誰もが望む故郷の姿」として尾道を称揚している。これも少し長く引く。

尾道は不思議な街だ。

元々は北前船が寄港する港町であり、山陽地方の商都として栄えた。水運に恵まれていたことから、造船産業も盛んだった。同時に非常に寺の多い街で、各地にある「小京都」の一つにも数えられている。文学の街、映画の街でもあり、一言で言い表すのが難しい多面性を秘めている。

しかし、一番びったりくるのは、誰かが言っていた「尾道は日本の原風景だ」という評価だろう。梶山は

原風景というよりも、こうあって欲しいと誰もが望む故郷の姿がこの街に凝縮されている、と考えている。山と海……日本人が好む二つの自然に挟まれた尾道は、非常にこじんまりとした街である。海——正確には向島との間に横たわる細い水道——が南側にあり、北側は小高い丘陵地帯になっている。市街地は海べりの平地に細く貼りついているのだが、車が入れない山側の階段状の場所にも民家は建ち並んでいた。私的な旅行で来た時、その辺りを歩き回った事を思い出す。しつとりと年輪を重ねた和風の家々、そこに自然に溶けこむ数多くの寺、狭い路地では丸々と太った猫をよく見かけた。夕暮れ時、五時を告げる鐘の音がどこから聞こえてきて、街全体がオレンジ色に染まっていた——これほど夕日の似合う街を梶山は知らない。

しかし今は、夕日のオレンジ色が血の赤に見えた。事件は、この上に展開していく。

### (3)、新紀行文

平成期、なぜ尾道か、尾道の原景を様々に探り描いた、新しい紀行文の集成がある。山と溪谷社大阪支局編『瀬戸内こころの旅路』（平12・1 山と溪谷社）である。その中の四編に、尾道を描いた様々の様態を辿ってみる。

山中恒「時空を超えてさまよえる町——尾道」は、山中の故郷である北海道の小樽と比して尾道を記している。小樽も尾道同様三方に山を背負い、海岸線に沿って町並が形成された坂の町であり、寺院も多く、「海浜の町特有の

すかにおおってくる海産物のおいや潮の香り」もよく似ていると言う。しかし、小樽に比べ、尾道は歴史も古く、「ゆるやかな季節の移り変わり」にあわせて、「よどみなく繰り返されてきた、町の人々の暮らしの確かなリズムのようなもの」を感じたと言う。

つまり尾道という町は、時の流れをとどめて、おだやかな日だまりのように、さまざまな人々のさまざまな心の織り成す一つ一つの小さな歴史を大事に温めてきたような気がする。竜王山の上の夥しい石仏やら、千光寺のロープウェイから尾道水道に向けて、はるかに見下ろす町並みばかりではなく、ちよつとした急な石段の坂道に、曲がり角の小さな石碑に、それが息づいているような気がする。季節と関係なく山の上から見下ろす尾道水道の夕景色は絶品である。まさに光の織り成す黄金のタピスリーのようなこの光景が、どれほど多くの人々の心を癒してきたことか。

尾道のもつ暖かさに癒しをみるのである。

しかし、ただに、温かくゆるやかでもない。新藤兼人は「段々畑とあの白い道はいま」と題して、瀬戸内の島々の世界にあるきびしさを回顧している。若き日、「尾道の自転車卸商」で働いていたことがある。仕事は瀬戸内の島から島へ回って、集金をすることだった。

尾道から巡航船に乗って、因島へ行く。昭和八年というときだから、まだフェリーというものはない。焼玉エンジンの音をたて、船体をふるわせて港から港へ行く。わたしは自転車を持っているから、ペダルをふ

んで島を回る。花崗岩土壤の道は、まぶしいほどにまっ白。除虫菊の白い花が、島の段々畑を覆いつくしていた。

段々畑は、天まで達するかのごとく頂上に至っていた。その畑のくの字に曲った細道を、農夫が、肥桶の天秤棒をしながら登っていた。

のちに（一九六〇年）わたしは『裸の島』という映画を作ったが、これはこのときのイメージがいつまでもわたしのあたまに残っていたからだ。

名作「裸の島」のあの厳しい世界を、瀬戸内の島々で見ているのである。

旅行家の仁喜和彦は、「しまなみ海道ひとり旅」と題して、「海つづき、島づたいに『歩いて行ける』のだ。広島県は尾道から、愛媛県の今治まで、瀬戸内海を『歩いて渡れる』のである。芸予諸島の六つの島が仲を取り持ち、七つの橋が文字どおり『かけ橋』となる。それが、瀬戸内しまなみ海道の魅力なのだ。」とその魅力を記す。旅は始めに尾道の持光寺で、「粘土を握って念持仏、にぎり仏」を作り、いよいよ尾道を出発する。

坂を下りて、JR尾道駅前から本通り商店街に出る。店々は何屋にしても地元的生活と観光客の旅心の両方をバランスよく満たしていた。若いやつらとご年配がまんべんなく行き交い、大にぎわいでもなく閑散でもないのがええ感じやなど、揚げたての平天五十円也を旅の特権朝いち缶ビールで楽しみながら、そう思った。辻々で台車を出して鮮魚を商うオバちゃんたち

の客とのやりとりを見ているだけでも、そのテンポと間は、アルキニストに癒しと肥しを与えてくれた。気分よく海岸通りを東へ。

行く手に尾道大橋とその西側五十五メートルに架かる斜張橋の新尾道大橋が見えはじめた。海べりなのに潮の香が淡いのは、目の前の海が、この先の向島とにせまくはさまれた尾道水道だからかも知れない。

明治期の紀行、志賀直哉や林芙美子などの知らない、尾道の新しい風光である。

竹内鉄二「しまなみ海道、六つのピークを踏む」では、鳴滝山からの尾道の美しさを記している。千光寺や浄土寺中心のこれまでの景色と角度を変えたこれまた新しい景色や風光である。

尾道市の西端、三原市との境にある鳴滝山からは、尾道水道が一望できる。大小いくつもの船が常に行き交い、それぞれが白く長い尾をひく。

正面には岩子島いわしが見え、御幸瀬戸でへだてられた向島とは向島大橋でつながっている。新旧の尾道大橋は左手の方になり、向島から因島大橋をへて因島、さらに南の島々へと続くしまなみ海道を目でたどることができる。

この山を訪れるなら夕刻がいい。駐車場のある八注池いけから十分も歩けば休憩所のある展望台にたどり着く。山頂周辺は公園として整備され、春はサツキ、秋は紅葉が美しい。

展望台から西日に染まりゆく海峡を眺めるのは至福

の時間である。やがて町並みに明かりが灯りはじめ、紫色に包まれた夜景へと変わっていく様は、さらに見るものをひきつける。

ただ、夜景を見た後、闇の中を駐車場に戻る際には、何らかのライトを携帯する必要があるだろう。

これらの紀行文群は、明治期の紀行と全く違う尾道の景色、風光を伝えている。

まさに、一種の「尾道ガイド」であり、逆に言えば、その名所によりかかった作品群とも言える。この期、尾道が文学風土として二重の構図を持ちはじめていることを感じる。すなわち、明治期は尾道の風光、名勝を辿るを目的とした尾道の旅であった。次いで、大正、昭和期、尾道を素材とした文学が成立する。そして、平成期、「尾道の文学」が名所となり、その文学名所を入れた文学が発生してくる。名所の再生とも言える。ここに「尾道の文学」の一つの姿がある。

### (結)、尾道の文学の意味——集約にかえて——

以上、明治期の名所旅行記、大正・昭和前期の尾道の文学作り、とりわけ倉田百三の悲痛な叫び、昭和後期の点景として登場する尾道、そして、正統的な尾道の文学作り、尾道の文学の文学化やご当地もの、新紀行文など多彩に広がる平成期などなど、尾道の文学の様相を垣間見た。全体に尾道の文学に流れるのは、一種の癒しの地としての尾道の姿であった。始めに記したように、これらは前稿の補

遺、補綴としてある。前稿と重ねてみて欲しくも思う。

最後に、これら尾道、もしくは尾道の文学の意味について、少し触れて集約としたい。そこで、取り上げたいのが、五木寛之の『百寺巡礼 第八卷山陰・山陽』（平17・3 講談社）の一節である。

五木は、「海の見える寺」として尾道の浄土寺にやってくる。この「海の見える」ということが、浄土寺の生い立ちや信仰の性格にかかわると五木は考える。瀬戸内海は、「日本列島の幹線通路」であり、「良港の条件を備えていた尾道」は、「瀬戸内海の中央に位置」して発達してきた。そこは、「東西の潮の流れがぶつかる場所。外から入ってくる人と、出ていく人の流れが交錯する場所。そして、文化や信仰の合流点だった場所。」であり、「ここでは異質なものがぶつかり合い、合流してさらに勢いを増し、大きな渦巻きのような力を生みだしている。そんな気がしてならない。」と思う。そういう場所に立地する浄土寺の姿に五木は注目する。ここでは「さまざまな宗派が生きたすがたで渦を巻いているのを感じた。」とも言う。次のように続ける。

本尊は十一面観音。しかし、それだけでは足りないというように、阿弥陀堂には阿弥陀如来、文殊堂には文殊菩薩、護摩堂には不動明王、地藏堂には地藏菩薩がそれぞれ祀られている。それ以外にも、境内には子安堂や丹生神社があるかと思えば、お百度塚もあり、包丁塚もある、という具合である。

そして、この寺には太子信仰もあれば、時宗の面影

もあり、浄土真宗の蓮如の名号までがあった。ほとんど何でもあり、という感じなのだ。

明治のはじめ、各地で起こった「廃仏毀釈の運動」の中、「地域によっては、名刹や古刹までが徹底的に廃墟のようにされてしまった。」のだが、ここは違う。

しかし、この浄土寺は廃仏毀釈とはまったく関係なかったそうだ。住職の小林師によれば、それは地元の人びとが寺を守ってくれたからだという。尾道の人びとは、仏教も神道もごく自然に、いつしよに受け入れることができたのだろう。

海に面したこの地にはずっと以前から、「融和」や「共生」という精神が息づいていたのである。

五木は次ぎのように続ける。

異質な物を排撃せずに、融和させるおおらかさ。受け入れて共生する姿勢。それこそが、二十一世紀にはもっとも大事になるだろう、と私は思っている。今回訪ねた浄土寺では、その融和と共生というものを肌で感じることができた。

いま、浄土寺から見えている海は波もなく、おだやかですべてを包みこむようである。その海の景色が、融和と共生の象徴にも思われてくるのだった。

「融和」のおおらかさ、すべてを受け入れて「共生」する、「二十一世紀」に最も大事になるものをここに見出している。

これは、尾道や「尾道の文学」を語って、一つの象徴ともなる言及に思えてくる。この「融和と共生」を心して考

えてみたく思ったりするのである。尾道もしくは尾道の文学の一つの重要な意味、意義の典例がそこにあるように思われる。

ここで終えればいいのであるが、しかし、最後に一言つけ添えるならここいらに尾道、尾道の文学の一つの課題があることも否めないだろう。それは、倉田百三の「いのちの中の一番のエレメントを引き出す空気がかけていた」という言にもつながる。

五木の言う、「何でもあり」はまた、なにか決定的なものはないのではないかという諸刃の刃となるところがあるということでもある。本当のもの、本当に心に響くものを尾道の文学は持っているのか、ご当地ものを横目で見つ、やはり、一つの課題にすべき、心して考えていくべきものとも思う。一つのヒントは光原百合が『扉守』などで示した尾道の原景、今井絵美子のいう「不思議な町並み」、本城英明のいう「不思議な街」の意味などを心して思量しつつ、新しい尾道、尾道の文学を創っていく必要があるのではないかとも思うのである。

以上、「日本近現代文学に描かれた尾道」の追稿である。

#### 〔参考文献〕

財間八郎『尾道散策』（昭52・5 佐々木印刷出版部）

川村盛明『広島文学ノート』（昭56・7 溪水社）

磯貝英夫編『ふるさと文学館 第四〇巻 広島』

（平6・2 ぎょうせい）

入船裕二『尾道今昔』（平7・2 ぎょうせい）